



初篇
下



4508
3c

玉田善次

新形

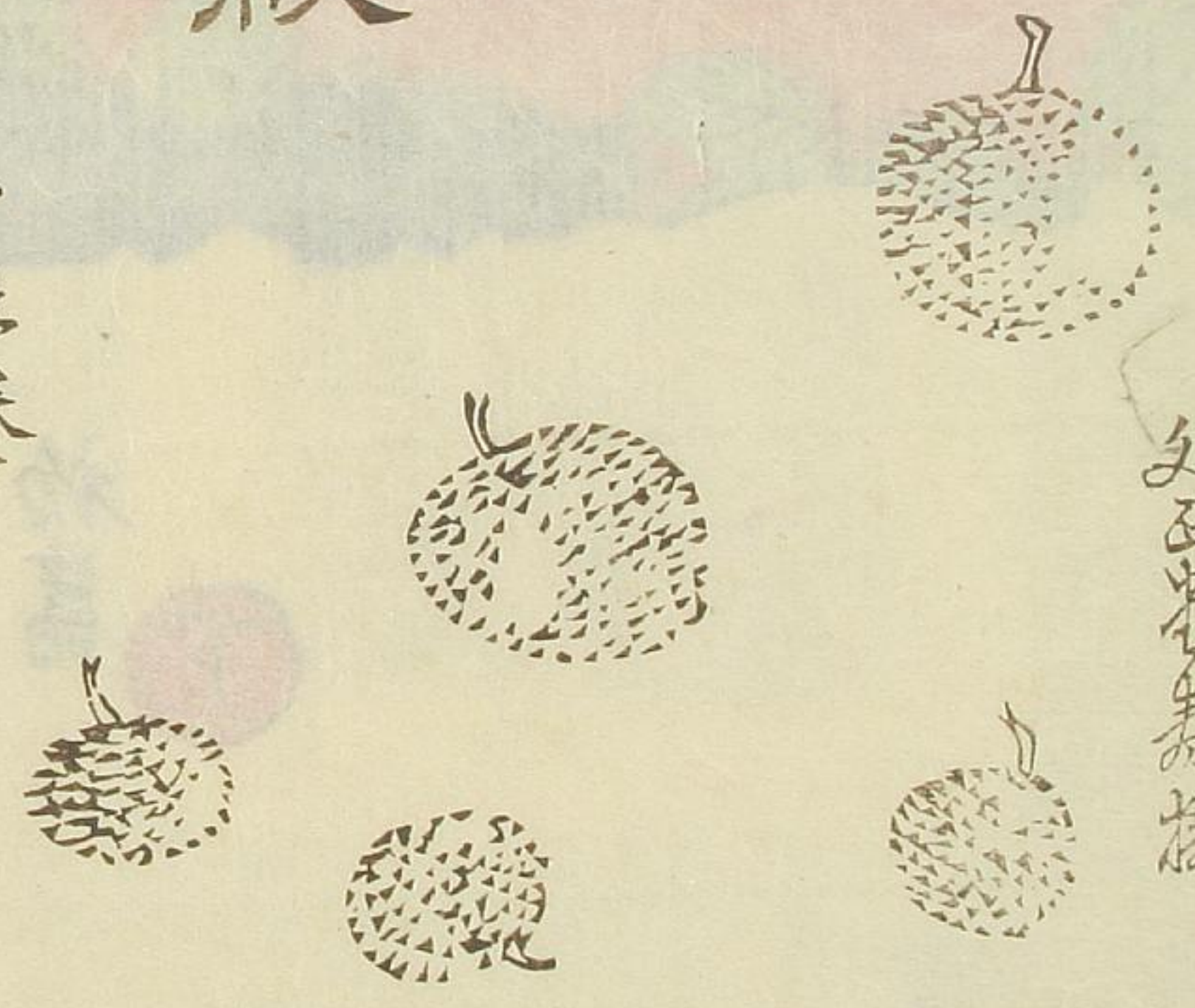
静機

小紋

梅星叟綴
逸岳画

下孔卷

久石中壽繪



<48-8269>

竹田善次新形賤機小紋初編卷之下

在静岡 隣電居主人梅星叟綴

第四回

當下徑のりの蔭より突然出て出て来る者有り吊灯其方へあり向けて阿誰
 と人々見てければ是乃ち別人あらば安東村の安東あるふを彼の一隊の賤夫
 們は是れ且那と一同が腰を屈めて路を閉けを兄弟由斯と知りて相互ひ進
 寄り一別己來の口誑を演つ疎向は遠くを兄弟が迷ひがかりより附るを掩めて
 安東の空を端一路は潰金を拾ひむと云ふ上占めいざ知らむ澆季薄俗今小
 して遺たる金を見認めよりその場を去らむ夜を守りて主を遅くする兄弟流る
 信美潔白多くゆがじ了得は富有ふ育ちたる人品見つてたのりかり目來
 放蕩とのく聞へたるが開志しを懐くうらひ兄弟流るる時ありて先考姉君の
 面を興さん然て吾が子の勤學ふ近時晝夜おこたりさればゆく道を辨へた

竹田善次新形賤機小紋初編卷之下

るも学力自性を冒厭し小けん痲痺病不は失毎せど暫く土倉ふ禁固めたる
を夕守り人の意りを豫てより竈ひを童背を毀ちて封ド金二百圓を持半
て奔りて行方も忘れざるなりぬ遊真金の紛失まとも吾男不道ちあせと
ち小村流を招き分隊して索ね不出遣りしより遅てと剛にぬ音はれ小更也
く夜半の光采あり妻女と兩個いふぞと嘆息のそを為たらんより吾も共
と立出はく僅くも尋念せめららむ小往來をあらぬ追人の流が必を踏も遊家ほ
人の通のぬ徑をこそと那方此方を潜行き思ては遠処へ出て来つ兄弟流が皆の
流へ結る志操しを偷聞して得よ母の子ありそと感するふ就けて猶日か子
の存亡いふやと思ひくもらる親らると云つて見く入る此方の人々今この
人がえうけたりと云らるるを心あそふ安倍河原へ行くとせしをぬくへさ
れて斯の次第この場は且那がムられ吾等の關係の脱たとりよめの此も
疑くありませうが眼があんまらか闇い々と吊灯一張き措て威置くと走

り行なり眼見を分て安東の兄弟ありち可ひりの語るべきはあれを是より
己が家へ伴ふべく丹封金を持て来られよと云ふの流をせん為ららん今
さら附抱を受くべしやと思ふ心を云ひあひさねと回抱してやを齎して夜
由た更らぬ是よりか別れ申さんと辞むを容るぬ安東がかんがえあら
ざるまありかんがえが亡母刃自の遺言を托されたる這安東のかんがえが成
人の後腹をあらがら初解をひそり小窺ふ兄弟のけまの夜蕩ふて遺言を傳
べき時のまあらざれば空しく逝たる今吾も今その志操を知るうららの慈母
の遺託を傳き一時も猶豫を去らむ此みて語るも難くはあらねど又吾も
とく偷聞する者のあらんも計られぬ御ありとてさ家へ来るを辞むの要
なきまのこそと論言棄る事故ありげるれば余らばと同胞の封金を又奪
あげて安東の後小従ひ伴ふれ来るその村の安東許に至りけまに至る人の
竊み兄弟を一室お招き入きて世ハ今まはよりぬれども造化の不利鬼神の

竹田村に於て始末

畫策かろうく感をもく今夜おんが捨ふる金貨の他人の者みあらむを
おれが有ありてこがみ戻る金貨みへあらむとくうりのわが疑ひて吾れ亦
るまふの病癒の傳澤せしうと思われん柳おんが母刀自の傳ても聞て
知りつらん令の姓母が色香は迷ひ亡爹いり慈愛あり由強て離縁せられし后
吾れおれの家折ふくへ金痰は依りて往來しつまど敢て懇懇おもせしを
女流ながらも母刀自が吾れを大丈夫とせられけん一日偶とふられて妻の産
たる兄弟のせ先さるるのしあく侍り怜悧思純へまだあらねどくあらむや人
くらぶ家や在ることを頼るるべし依て妻が準備の金二百圓此み作り之をめぐり
玉のりて倘れれ們が便宜をうしる路頭は呻吟しとも侍らば此を以て救ひ
むるべし余れども性の善悪邪正をたゞ定め取らむらむ小人は玉を
抱らせ盗人の糧を齎らるを頼ふるらば悔しうも勞して功あり子どもを為し
却て害を遺とも似れを開かん眼かみ任せ侍らん若く人み成人は必ぞ一

期の窮厄ありあるん開き此金を以て救はるるれを救はせむへ此の威妻が年
末の凶賊と所有の衣服調度を沽却るして合したる二百圓の兄弟は白田づ
の紀念おれ母子三個を救はせむおれ慈お慈お慈おとこいり慈母が後宮の不
容易あるを信認して吾れ委まらハ女流ながら知られたる吾れ又死をた由辞を
べからしと辞む処ハ一族あり且いまだ老朽ぬを自認して兄弟の成長を俟て
て后親の料ふる倍をこあらと辞を容ぬ母刀自の否とよ妻ハ一族の兄弟
の縁者おれは縁断れてハ既おれ今日より親しうらぬを争で後年を委ぬべ
き非除委ぬも頼るるまの玉の緒きれもくくさき后れたのりハわらわを和
君の日來これくより親しきまのりせしああらむとも内志操を伴きまう
て頼る母子が一大至承諾おれと切よ乞ふ思慮を深き母刀自が同胞あたるの
子を思ふ間も明るき理りの男勝りの慈悲之感とて余らばと承諾て頼り証書
を記んとせし母刀自の推しとめて証書ハその人を疑ふより要求をた処ふ

町内町外町の町内町外

信義の誠諾は何の要せん余らバ封金二百圓措て去りて三昧ありわれ
敢果るくならきに縁て是乃を極めたり吾へ遺托の義を重んトかん衆們兩
個の成長を俟てを久しき村胆の心いとつふ苦悪を聞ても見ても好くらぬ
バヤと亡霊を慰むる時遭ハぬをいふせんと遺去ハハ嘆き現在ハハ眼
もあたらふん衆們が志操の正しきを今夜をじめて知れたる助てこそ賢母の
同胞継母が計るふちりりて情を失ふひハ年まだやうぬ一時の過失
今より行状を改ためて路に遺金をひるハさる性善を中として慈母が紀念の
百金つくと見送ふ資材と取て親戚の力を假りて獨立して業を死さハ
父が離別の母もろとも開道失ハ父ハあれバ父母亡き後ハかん衆が兩親大
妻の帰嫁を要し兄弟兩家は本主を奠りて後を吊らり僧侶を請て千五卷
の讀經ハ信したる孝親功德此ハあべらむを後又實地業は就き足らざる処ハ吾
も亦相まひ助けばさる下り勉めよと諭したる長母のがたりハ道去かた

を悲傷らるる慈母の實情まことハ海の恩深き山より高く積ふなる兄弟感涙
を拭ひあぞ類ハ安茶を拜禮して猶もく末の活業ハ内心附させむひてよと
乞ふを安茶志を、點頭賢母が遺托のかん衆們あり争で疎みかりハべき終
身一臂の力を盡さんろろ隔なく相談ひねと二百圓を更なめて通與を兄弟
かゝいたまハ内教諭ハ依り小生どもが是より閑業の工夫を決め資材を要
をいまで復更とめてかん預ハむらるべと返を金貨を安東ハ實ハ然る
りと取り措て是や曉天ハ度るべ一霎時ありとも枕ハ忘ねとりハを見
所ハかん小生們ハ大異方ハて思ひよらむも呂今より世の便宜ハありつき竹
り令郎のかん行方ハまだ聞ハざるハ心めとほ我ハこそきトウリ立てて遠
逝を尋ふまのせまハ下ハ一つハかん衆方ハ捜るよまが由ハひみん並ハ
くべしと兄が云ハハ弟ハ余ありと立くるを主人ハ急ハ声ハして否とよ曩ハ
村中より數十人分際して四方ハ尋ねハ出たれハ隈なく養うりとむべしハ

竹田の次郎

極も多夜も明んふ燃て徒人も降り来ん空を向てかん衆們が今から行
 くハ益る一と首むるがし門前驚いと人声して今郎を將て来たりと声
 くと聞へればさてハ無事して帰りしりと安東夫婦が去り出て赤とだうなる
 狂子を迎へ両色を拿りつ辛也て復士藏みかしとめつ衣履上茶と介抱伴
 るひ来たる人々酒よ食よと勞らみかど不夜もそやけつり明つたりて尋
 ねよ出たる諸人が迎くつり来よければ一同へもてま一の酒食杯盤大雜
 選奴婢の奔走大少をたらねが兄が狂人の妻を不降しを支拂はしつて
 庵橋むたらをもを幫掌つ當日の空く辺より待て万端安東の指揮し就
 て兄弟の静岡の呉服町おかのく相恋しき家とトて呉服雜貨の店を開き異腹の
 分る當時の山千及び吾次希その他の親戚へも私一の怨を結るを隔て
 るく交りければ世の人とよ之を賞して商まひ漸次は繁昌とすおぞ煤酌あ
 りて兄弟とも妻を嫁りていよきまをく竹田の一族連なうて家ハ新旧本末お

嫡庶を異ふ志なれども此方の兄弟が榮
 へゆくハ慈母が遺徳と安東が重義も馬
 れる處あるへ余れハ安東が義を失ふ
 へぬ徳を報ふハ天助まらん升男の痴癪
 全愈志たれハ父母の怡悦大かたあらむ
 夫より勤學讀書ハ廢せど田舎の多
 由あらぬ博識と他いふれて后ハ家督
 相續したり彼の竹田の同胞とハ義兄弟
 の好とを結びたがひみかありあひ
 とど同胞兩個及び安東一家の事ハ
 下み談柄あり



第五回

竹田の一族連なうて

表話竹田次郎の安西別家としてより取らるる後川の女遠世の性優く結
く結ふも仕へたれを家内和合して男女ふたりの子を役けたる 文婦のかしら
ひいとむらほく暮せしむどふ言次郎の世にたりふ伶俐くも稼殖して同地
屋形町は地所極危の賣りのあじを購求めて安西より居を移せしむ又商業
の都合よりのて西寺町へ移りたる 那方こそたふ買りしめたる 地まじり化
も立らるる運よるまひ時よりはん米相場よりかりしとんく 梅子の調子
よ、濡まふ粟のつくり取り世に那をれを貧乏を為るりのやとむらふ不
どふ又してむくく由金の利得るをりるる勢の破竹のどくく して貨幣ハ
ゆり小異らるる紙幣ハ木の葉小ひじく見ゆる足ら福長者とまりいづる此
概々小まじりつもの商法を大きく為るる銀行をも組立べしこれふしこの此
まの縣下ふ在て不都合あり家族一同ひき俱して東京へ出て盛ふふ事を
るふ如くまじりと思ふ意を母も妻も告て決意をたしりるを親類一同へ云

ひ出して出府の整装を考るむどふ妻のおちよる世間見む夫次郎ふめられ
て在れど生れ土地をさるるくぐ心のとまらぬふあぞ兄結次郎の宗左工門
ふ京へ出るしのか夫言次郎がえららひの可否のりふとらうら向へ宗左工門
へ眉をひそめて言次郎の伶俐性商業の進退ふ如才なちまつりてハ
いて造化の好くも運ふるふたれれば此機ふハ何をしても摧損ッ
このあゆみのだう人間の身の上の天地陰陽の變動と同ト理のものだう朝
夕風の吹らるる寒暖ひとからぬがごとく春暖かり夏暑く秋冷やう冬
寒き時候の正しき処ふして人の無事暮まがてに然れども時として風雨
雷電地震あり況んや寒中の雷鳴四月の雪（陰曆ふ云ふ三月あり）是陰陽の
変ふして人ふ不時の災難あり造化せ渡りくまりりてゆくい時候の不同異
多らむ故の俗ふも好らぬ兆と風が變つたと云ふらるる運ふ棄てて事を
做すも風が變つて来た日ふハ仮令バ今日を暖くふ櫻の花の盛りあふも一

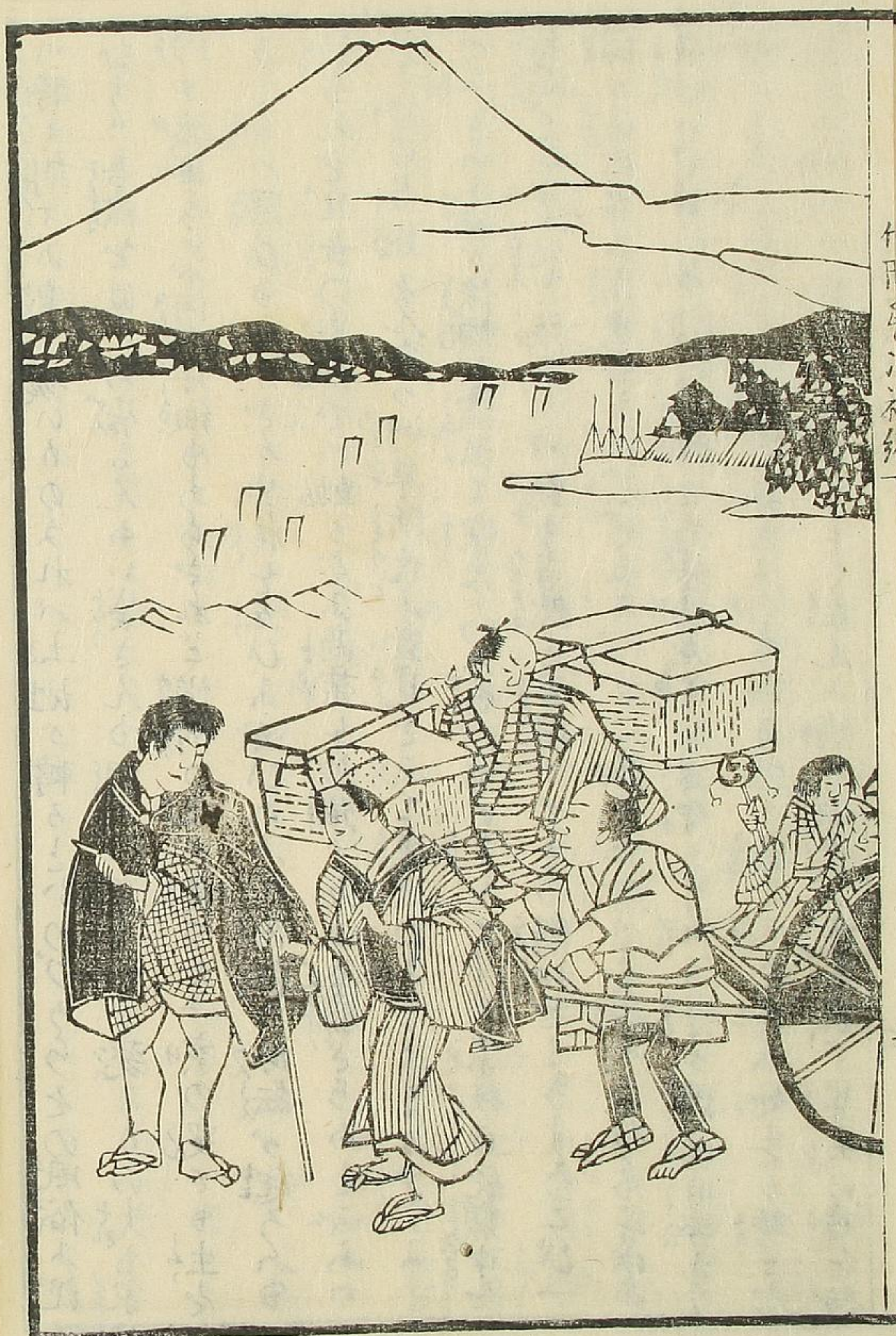
終の罷ふあを見らうげもよく吹ちりてんだら木とあのかごと一然いふ
事があつても生れた此土地に居れば親類縁者のあつたり知已も多けき
まんざら根投ぎ同様は僵れるを見ても在まいが知らぬ土地へ移つたら
日ぐり五十里足らぬで臨時至急の要に足らぬ殊に東京の俗ふゆの石
の上の住居よて火事盗賊の多い地人気が田舎といふ大さよ異ひ常は奢移俗
ひまれは商業もよびろ不出来れと随つて要途も掛り暮らたも此土地といふ大層
え相遠だつら東京よて千兩を利得るよりこの土地よて五百兩まうける方
が正味の実入が多し道理実はこのを添さんくら東京へ行くといふ吐一のあ
つたとき然思つたが別な那たらふと相談をうけられた訳でもは只一通
りの吐一ふて決ませられど動静あれは吾が老實的く石橋を叩いて渡る空
ま見くもと云ひ半しても異みゆのといふ意にて他人行美入それの加祝の
へ云たりのいふ実吾の今般の東京行へ賛成せむ且深念をめぐらるる人の情

へ時々刻々不変り駭いゆのなれば土地が轉るとかのづららその風俗も泥
むより吾妹をはとめ袋さんの中袋さんも朝夕の意もちが変るゆの夫も家
内が無事なれば何の仔細もあらざれど倘例の風が變つて一家の變でも生を
ると今い思ひ由設けざる苦情を互ひみ云ひあめて内訌の紛紜が起るゆ
計られど且吾の勘辨での動うどふ商業を勉強したるが全勝とろふと云ふ
一々理の当然そんなら何卒所天よ意見を云て東京ゆきをよまるやうに
て下さると妹が依頼を黙して宗左の兄をよめ家後の親類中を
統向てかりぬ処を後らへハ孰も当然と雷同してその懇切をうちまうとび一
同が岩次希ふ末末ゆき不可なるべいと推し止むると再三も岩次希
承諾いざかん身門の成嗣生的昔時老実を固守してゆる開が因循旧弊より
斯ては百目百杯の頑惠の性あらぬもあるべし総て人の世ふ処まら時まら
至らぬ潛流の蚯蚓もひとしく在んぬ倘一風雲の余も乗下昇天の時を得

十日... 岩次希

ても猶舊依りて操を失ふ誰う神祇の勢ひを知らん人の時運も適ると
 きハ去生る地も居を轉ト去生る業を新と創とも敢て障得のありのふ
 らど尻んや得たる業も依りて商社の接近一居と轉ト今一層盛大に行ふ機
 を失ふべからず俺豈漫不繁花を志とひ妻子を空に伴ふて故郷を離る
 ものあらんやと人の意見も聴容な管次第はさくきつて金の利得る勢ひも
 まうしてまうむ東京めきを止めわひたる妻のおちよも兄が意の理りどと
 思ふものからいらせし所夫も背くようまければとも不連立つ旅はるりそ
 めあらぬ拙後ハ衣服調々の廻り或ハ馬の脊も負と重荷も小づけの二
 子を俱せハ一トつたならぬ三じらく五う故郷へかへり来る時を期めぬかま
 ならぬおたのめしく相おりの今も夫婦も六はくハがて七の種どといはれ
 ぬ身もあら雪のつり九惠をむる河路より都の十京へ出て零落を
 布が彼の神末とるりえそ美さへむをたで僵れざるは縁故よぞありん結

竹月 大 力 一



竹月 大 力 一

て是夜舟に遺したる彼処是処の所有地を宗たる小托りなき母も共ふといふは任
 して船主夫婦の五人づき西掛を擔ぐせし雇僕ひとり召つれて静岡を立出たれ
 ば悪気船あて下はり横濱へ去るは易くれども釋兒を連るは船中の不都合
 ありとて東海道を去るが官筆を向てのびりゆき富士と見岩小瓶ちりき
 驟の掛間ふさやうある植生の屋の惣所は齡四十をりりの女房が床ふおし
 苦痛の体是の茶座の老媪も个井を磨りて困したる動静の見過し難れ
 ば次次舟へ行くまより听けば沿津ふ所要ありて箱根より來し婦人のよは俄
 小病ひかき起りて野婆店へ休まれたが湯次ふつこの這容體ら合せの茶も
 んだれが店で取次陀羅尼助を服せたれども功驗あらむ宝丹が利刃ぞと病人
 が申したれと生憎ららぬ取次はか医者さんも三鳥の沿津へむらひおとらね
 ば是も送らせと遣りたくも此台しとせし使小も馬も車も宗れ升ま
 り一是小困りこり升といふふふと湯次舟の幸ひこも宝丹あり併し斯

う見つけた処餘り劇き疼痛の容體り宝丹あて湯せらぬこも何れら
 準備よと昔は心中志々たる琥珀の熊膽一二分頒ちて老媪は興へおき好く機
 をして煮り玉へ何も功德ありあぞと云ひまを過ぎ去じの通りぐらう見
 もあり病人を救ふ側隱仁急むらひを欲せし所為ならぬも良薬の宝丹と琥
 珀の熊胆功驗觀面彼の病婦は苟且ある宿癩の瘡のおとしられば忽ち胸
 ひらけそ哉あぞとくみ苦痛をこそれてよろらぶと大かこるらむ共ふよろこぶ
 老媪は謝して我をこそくを礼と取じつ何れの人ともまよはまき湯次舟が過ぎ
 ゆき其方の天をく舞う感涙をそきつ淋ら煙うとどろり小深き慈悲を謝
 あへど恩も荷もて且見候く浅香あらぬ深津の駅へぞおもむきまら

総論

凡そ人の世の処を時貴賤貧富あり憎み利鈍好むあり随うて傲と事あり
 事あれば必ら果あり果ある何を因まらん善惡應報の理り豈佛説のそら

竹田善次郎が果てしなくもの狂い、度々人理を以て評さるるが、当時傳聞に
 依りて記載せられたる静岡新聞第七百十六号同十八号同廿四号の正に曾て流行を這ふ梨
 園の洗劇の脚色を小川座の良一大いよ声評を得たり余れとも後報小大同小多あり
 処の聞未完全止まじと本地の書肆正文堂余の一篇の草を乞ふ是も於て今の果ある因
 を昔の探知と前後二帙の稿を授け前帙は是開因後帙は是の果以て結實を婦女
 の示を見ん妻を遺托のてき賢い似るも短意ある授け九婦の所為あり并忍痛
 執念深崇て逐次お惹くとも非あり逐次お母の産産ある映の開子も思惟るの天理
 彰々豈陰鬼を假らん拙文性微意ありの逐次お東京啓行の餘り数字の前後の故
 意も出づ文宗左門の妹も云ふ意見の水準の模法ある具眼の人の知るはあらんんん
 り算へて何と考る一時の戯編も鳥辭あり哉

駿州静岡紺屋町六十二番地
 作者 萩原乙彦
 同所上魚町字上五番地居住
 校元 今津美之助

明治十三年十月 日御届

小學用本手紙字引本類

萩原乙彦先生新著書目

駿州静岡上魚町字上五番地
文正堂今津美之助校

新撰 増補 女大學

全冊 定價一圓

此書ハ貝原先生の女大學の新編を刪補したる女子教育の要本なり

讀書 百字辨

全冊 定價八錢

日本民権次郎長譚 十篇三十大 價 金十錢
改正遠江國全圖 大政 四枚ツギ 價 金三十錢

俳諧 早合點

全冊 定價三十一錢

此書ハ發句を作る心得を悉く採て初め小雜画を加へ季寄と部類して初心の便覽とす

竹田 賤機紋

全六冊 初編 定價三十一錢

是ハ静岡閣の噺の高かりし子殺の事跡を合巻し綴りたる先生一冊の戯編あり

新合巻 切付一代記武者二冊物

家製 朱青肉 いんふく 上朱肉目寸上及 以下腹 裏

